白桝粉屋おどり

おいとこ節発祥のいわれ

秋にともなれば、鎮守の森には笛と太鼓の音が響き渡り、神前では神楽が奉納され、芸能が被露された。それは、豊かな秋の実りを心から喜び、村をあげて神仏に感謝する大切な年中行事であった。民族芸能の伝承は、村の農と神事を離れては考えられない。民謡は日本人の心の故郷と言われる所似である。

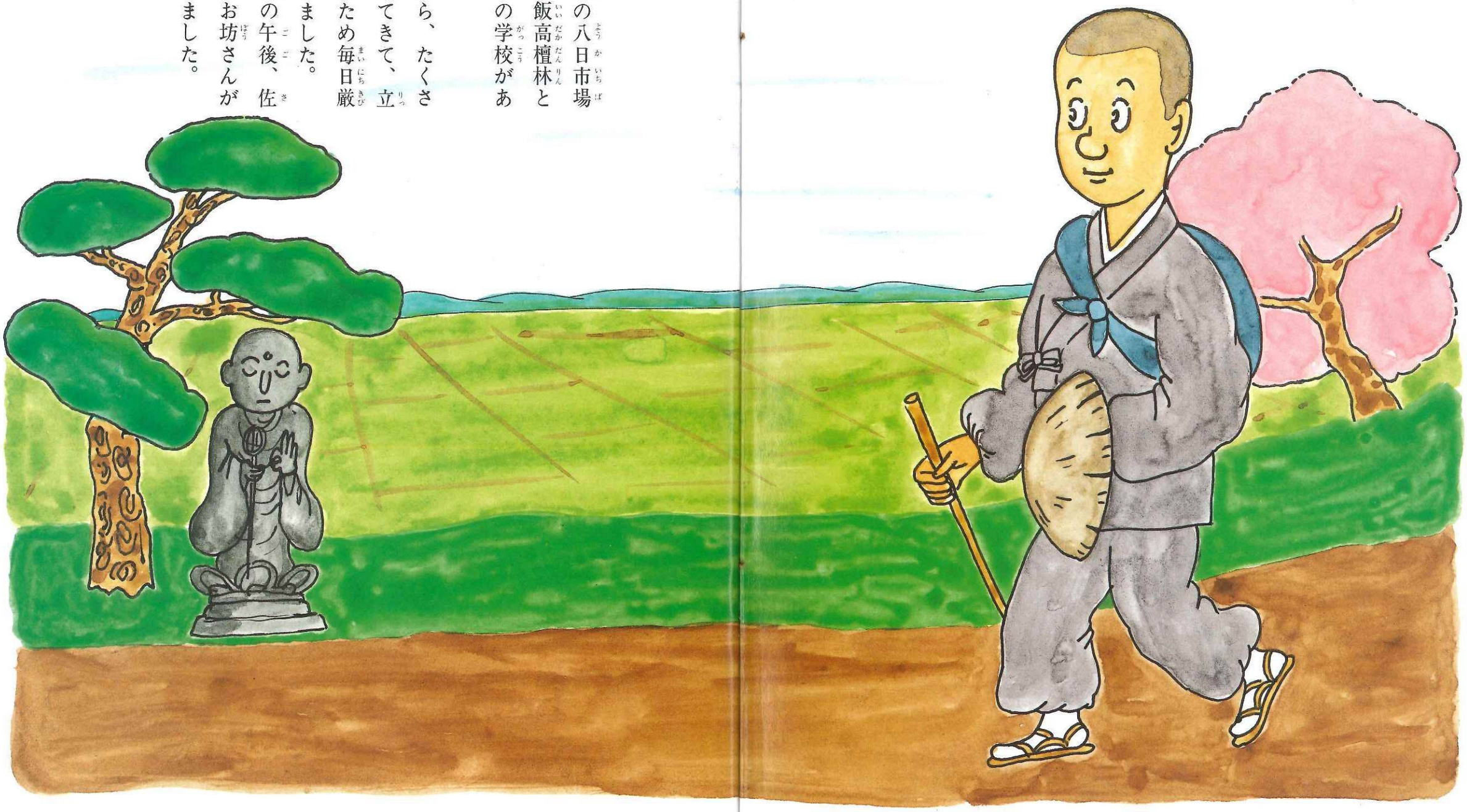
我が町に伝わる貴重な芸能を継承し保持して行く事は、現代人である我々の義務でもあり責任でもあろう。

本書の発刊が契機となって、我が町に伝えられたさまざまな芸能が見直され、復活継承されて行くことを心から望みたい。

今はむかし、現在の八日市場市の北のはずれに、飯高檀林というお坊さんのための学校がありました。

そこには日本中から、たくさんの小僧さんがやってきて、立派なお坊さんになるため毎日厳しい修業をつんでいました。

あるうららかな春の午後、佐渡からひと人の若いお坊さんが下総の国にやって来ました。



三里塚を過ぎ、二里塚にある茶店の前を通ると、その店の娘さんが、〝お坊さんいかがですか、お寄りになってお茶でも召し上りませんか〟と声をかけました。

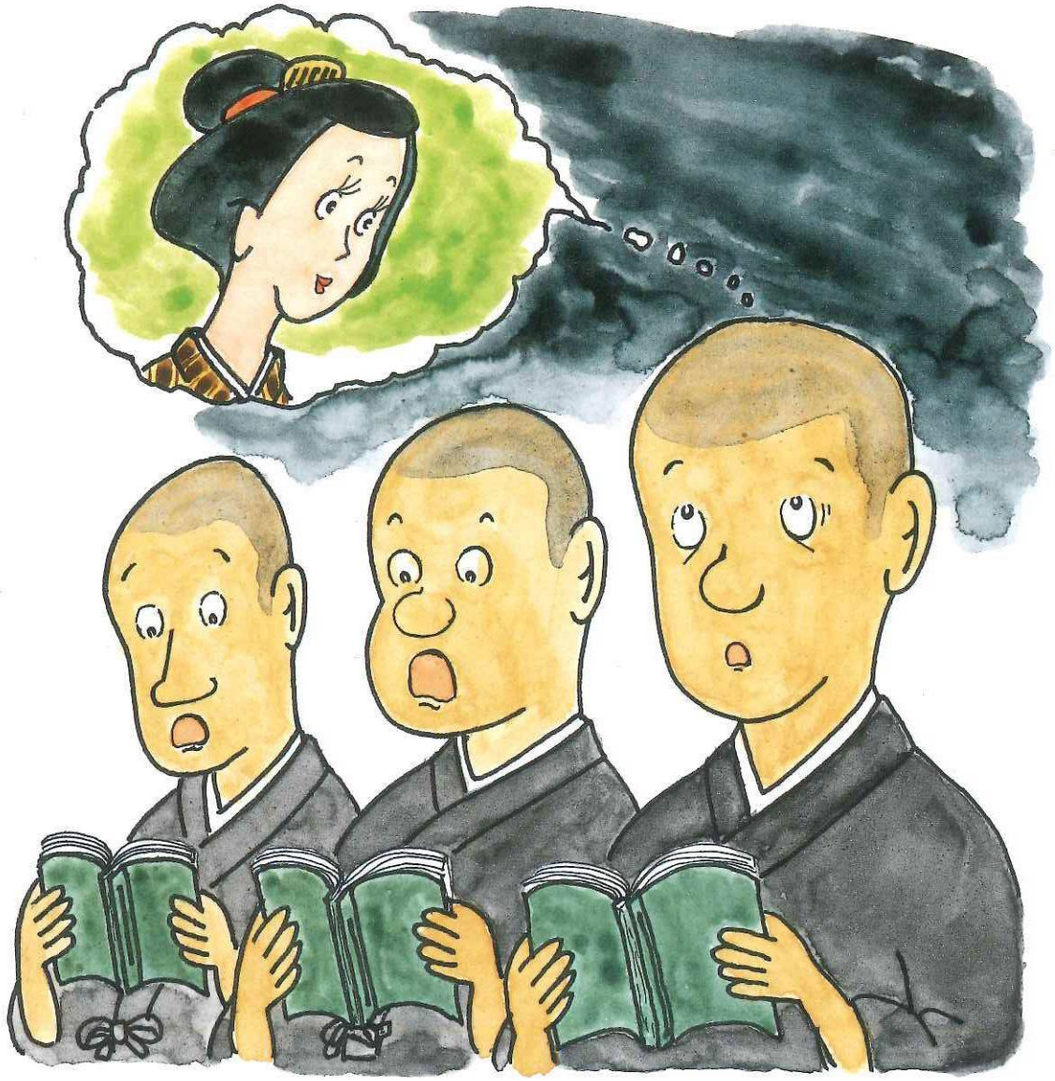
足を止めたお坊さんは、その娘さんの顔を見ておどろきました。色白で、美しく、とても優しげな娘さんでした。

お坊さんはその美しさに見とれてしまい、思わず縁台に腰をおろしてしまいました。

お坊さんが〝飯高檀林まではあとどのくらいかかりますか〟とたずねますと、娘さんはにっこりと笑い〝お坊さんの足でしたら一時(二時間)もかからないでしょう〟と言いながら名物のだんごとお茶を運んで来てくれました。

その声のきれいなことといったら、まるで小鳥が歌うのを聞く想いでした。

とってもおいしいだんごとお茶をいただいたお坊さんは〝どうもごやっかいになりました〟とお礼をいい席を立ちましたが、ふとのれんを見ると「白桝粉屋」と書いてありました。



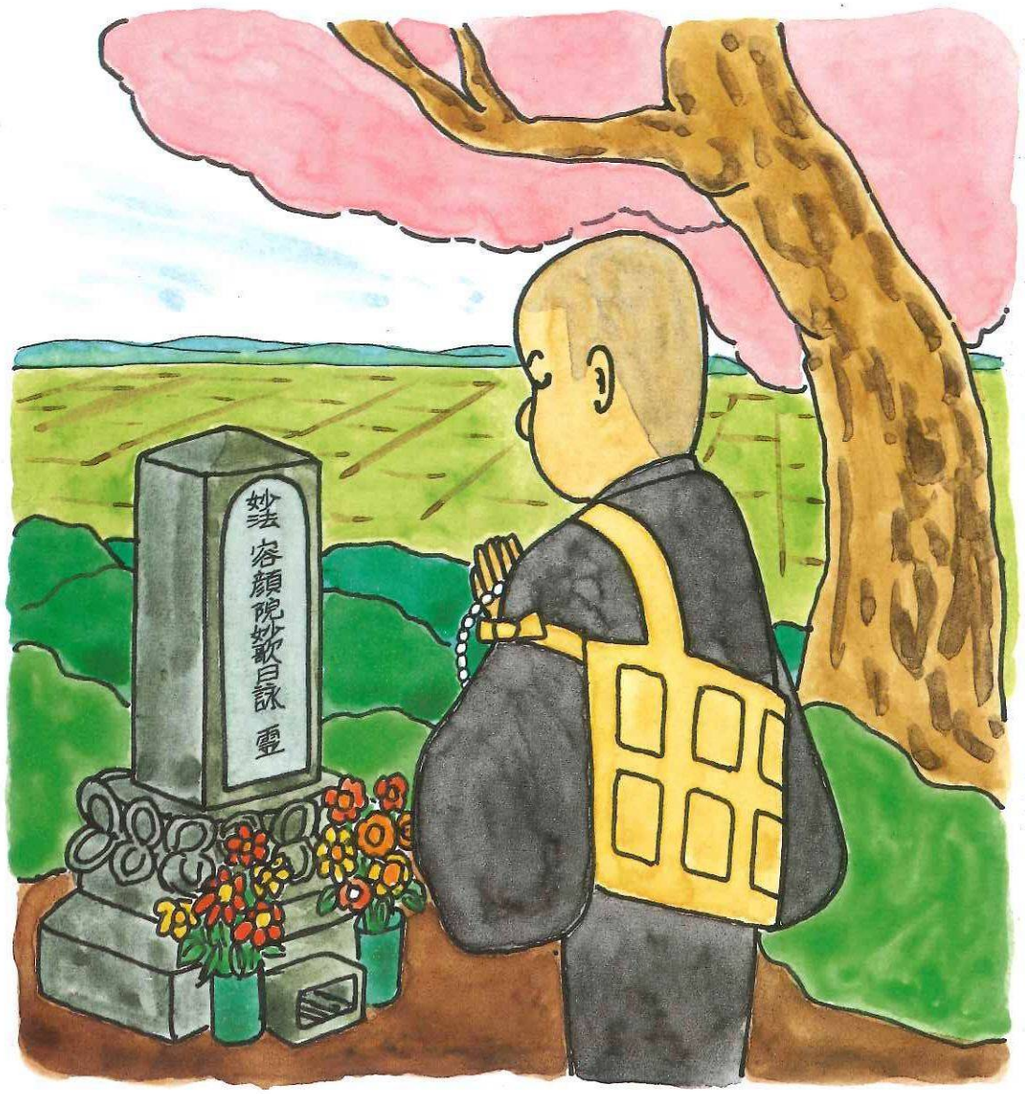
檀林に入りましてからは、お坊さんも他のお坊さんたちといっしょに厳しい修業に明け暮れる毎日でしたが、ときとしてあの娘さんの顔を思い浮べるのでした。それはあの春の日の陽射しのように、ほのかで優しい想い出となり修業に疲れた心を慰さめてくれましたが、〝こんなことではいけない〟と自分を責める時もありました。

修業中の僧ですら心ひかれるような美しい娘の名は久子といいました。

三年余りの厳しい修業が終り、佐渡へ帰ることになったお坊さんは、帰路に再び白桝粉屋に立ちよってみました。ところが、あの美しい娘さんの姿はみあたりません。どうしたことかと店の番頭さんにたずねました。

すると番頭さんは目を伏せて「実は去年病気で亡くなりました」とさみしそうに答えました。

その言葉に驚いて声もないお坊さんは、あの美しい娘さんの顔を思い浮べながら「美人薄命」ということばをしみじみとかみしめるのでした。



久子さんの菩提寺は近くにある徳蔵寺というお寺でした。お坊さんはこのお寺に参詣し、久子さんの菩提を弔いました。

そして、久子さんの墓石に刻まれた戒名を見てびっくりしました。「容顔院妙歌日詠」と書かれてあったのです。

とても美しく、きれいな声でいつも歌を唄っていたという意味のこの戒名は、あの娘さんにぴったりのものでした。見事な戒名を作った徳蔵寺の住職さんにあらためて敬意を表したお坊さんは、二、三日徳蔵寺にとどまり、久子さんのために歌を作りました。

やがてその歌は、当時の飴屋さんや、飯高檀林に学んだ多くの僧侶によって全国各地に広められていったということです。この歌が、今、各地で唄われている〝おいとこ節〟なのです。

現在でも白桝には〝正調おいとこ節〟が〝白桝粉屋おどり〟とともに伝えられ、県の無形民俗文化財に指定されています。

民謡

白桝粉屋

エンヤーホイ

おいとこそうだよ　香取、印旛、武射の郡で　〃
音に聞えし　白桝村にて、木内の本家は　〃
粉屋で御座る「一代　二代の、粉屋ぢゃ御座らぬ」　〃
先祖の代から十代伝わる、粉屋の仁ヱ門　〃
そとや内には一人の娘が、むこ取り娘で　〃
年は十六　おさよ　と言うてな、きりょうの良いこと　〃
卵に目鼻をつけたる様だよ、成程良い娘だ　〃
あの娘と添うなら　三度に一度は、人の目忍んで　〃
朝は早起き　水もくみましょ、おまんまも炊きましょ　〃
備前の摺ばちで　さんしょの摺こぎで、ころり〳〵と　〃
お味噌も　すりましょ手鍋も下げましょ、内の家風も　〃
知らなきゃならない御作法も知らなきゃ、むこにはなれない　〃
そのや　あいまに粉もひきましょ、おさよと二人で　〃
石うす　まわせば　よい粉できます、よい粉できたなら　〃
白木の粉箱にうんとこさつめてな、明日は粉売りと　〃
仕度をなされて　きゃはんに甲掛、四ツぢのわらぢを　〃
しっかと　はいてな東は飯岡と、銚子の端まで　〃
西は東海道の五十よ三次、粉箱かついで　〃
粉よし〳〵と売らずばなるまい、おいとこそうだよ　〃

解説

白桝粉屋おどり

（県指定無形民俗文化財）

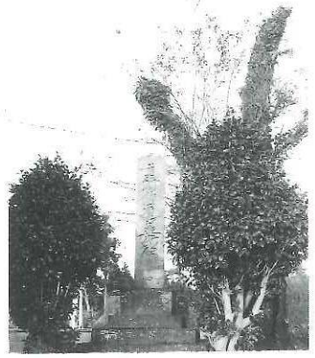
言うところの白桝粉屋とは、千葉県山武郡芝山町大字大里字白桝の木内覚氏の家であって、その場所は、不動尊で名高い成田山から十㎞程東に下り、また、仁王尊で有名な芝山から北方に四㎞の地点である。

昔は銚子方面から江戸へ抜けるいわゆる江戸街道の道筋にあたっていた。ここに昔大きな粉屋があり、頗る美人で気立ての優しい、親切な娘があったので、婿になりたいと唄われ始めたのが、「白桝粉屋おどり」通称「おいとこ節」の始まりであると言われている。

日尊上人の開山にかかる飯高檀林は、立正大学の前身とも言われ、全国各地から学僧達が参集して、講学は極めて盛大であったので、ここに至る道筋は、僧侶は勿論、信徒講員で賑わった。

ところで、檀林に通ずる三里塚一帯は、佐倉藩の野馬放飼場となっていた為に、人家が少なく、狐狸出没する荒野原であったので、いつの頃からか旅人の便を図るために、一里塚、二里塚、三里塚、法華塚などと、芝を積み塚を築き里程を定める目安とした。

今では殆んど知る人もなくなったが、一里塚は多古の染井にあり、二里塚は白桝に、三里塚は下総御料牧場前に、四里塚は死に通じると言うので法華塚とし、そこ駒井野には南無妙法蓮華経と題目を書いた供養塔を建てた。この内三里塚と法華塚は地名になって残っている。



法華塚・成田市

古老の語るところによれば、この道を辿った僧侶の一人が、二里塚にある白桝の粉屋の店（タナ）でひと休みし、その娘（三人姉妹で美人できこえた）の美しさに感動して戯れに口ずさんだ謡が、修業に疲れた若い僧の心を癒す一服の清涼剤として、檀林内で秘かに唄われ出し、やがて学成った僧侶達によって、それぞれの郷里に伝えられたのだという。当地方には、飯高檀林の他にも、多古町　中に中村檀林があり、日蓮教学の研鑽に集まる若い坊さん達の数は常時千人を超えたと言われるから、その事は十分に考えられる事である。

なお、歌詩の始めに出て来る「おいとこ」と言う言葉は関東言葉ではなく、佐渡地方の言葉である。佐渡は日蓮上人流罪の地であり、民謡の極めて盛んな土地柄でもあるので、或いは佐渡辺りから檀林に学んだ若い僧侶が原作者なのかも知れない。

中村檀林（日本寺）・多古町

木内家は領所取締に命ぜられた程の家柄であるから、粉屋といっても粉を挽くばかりでなく、この地方の農産物を一手に扱う今で言う穀物問屋のような役割を果していたらしい。

また、お店（タナ）と称して団子などを商う茶店のようなものを、屋敷の一角に持っていたと思われる。粉を挽く動力は勿論水車であるが、当時は高谷川の水量も豊富で、十分間に合ったのである。

現在の白桝地区

いずれにしても、おいとこ節の発生は、これ等の檀林と深い関わりがあったと考えるべきだろう。さらにおいとこ節が全国各地で盛んに唄われるようになるについても、日蓮宗の檀林に集まった学生達をおいては考えられないところである。

次に、銚子から江戸へ抜ける生きのよい魚や名産の醤油を運ぶいわゆる生（ナマ）街道と呼ばれた江戸街道の果した役割も無視できない。この街道の人と物との流れと共に、江戸一円にこの謡が伝えられたとみられるからである。また一部には、天保時代老中水野越前守による印旛沼の開鑿工事に集められた土工達が、この謡の伝播に一役買ったとも言われている。

おいとこ節は一名、飴屋節とも言われている。飴を売り歩く人々が子供達を集める為にこの謡を唄い歩いたからである。飴屋とこの謡との結びつきは定かではないが、飴の原料である穀物を扱う木内の本家筋（良久・号有蹊・家号仁右ヱ門）は墨田川辺に商家を構え、手広く商売をしていたというから、何らかの形で飴屋との関係が生じたのであろう。

また、大正から昭和の始めにかけて、芸者さんが芸事を始める時、最初に教えられたのが、このおいとこ節だと言われている。この謡には踊りが振りつけられている。二人の女性が男役と女役とに分かれて一組となり踊るものだが、男役が手甲脚絆、豆絞りの鉢巻、衿に白桝粉屋と染め抜いた半纏、半股引に白足袋を履く。一方女役は、絣の着物に赤い腰巻をのぞかせ、白桝粉屋と染め抜いた前掛けに、赤いタスキに姉さんかぶりをする。

白桝粉屋踊り

この姿はいかにも素朴だが、何となく艶があり、花街で好まれる雰囲気を十分に持っている。

不思議な事においとこ節は、伝えられた地方〳〵に次第に定着し、やがて歌詩をその地方向きに変え、その地方の民謡として受継がれ、発祥の地である芝山を離れて、より多くの人々に唄われるようになっていくのである。

この事も檀林と無縁ではないだろう。なぜなら、学僧達はやがて故郷の名刹に薫じ、地方文化の育成に力を傾けたとみられるからである。

さて、粉屋の先祖の事であるが、伝えられるところによれば、千葉氏四天王の一人木内氏に出ずるという。千葉氏は桓武天皇にその源を発する関東武士の名門中の名門であるが、戦国時代に至り次第に零落する。その属将である木内氏も、その居城である香取の米の井城が里見氏の攻撃を受けて落城す

ると、幼少の当主胤良はその母と共に親族である飯櫃の山室氏の元に身を寄せる事になる。その後、天正十八年の小田原攻めの時、北條の幕下に属した山室氏の飯櫃城もあえなく落城の憂き目に会い、以後、胤良は飯櫃に土着して、本宿殿と呼ばれたと、木内家の系図は伝える。この木内の分家が白桝粉屋と言われた木内家である。

粉屋を始めたのは胤良から数えて六代目の良栄の時で（享保十六年没）あるが、歌誌に出て来る十代伝わる粉屋の娘というのは、胤良から数えて十代目の文司良幸の娘久子（三人娘の長女）である。木内家の墓所に容顔院妙歌日詠と刻まれた小さい墓石がひっそりと建っている。久子は、父の兄有蹊の子良胤に嫁したが、惜しくも十九才で没した。

久子の墓・白桝

容顔院と言われるからには美人であったに間違いなく、妙なる歌を毎日唄っていたという戒名は、久子の人柄を言い得て余すところがない。

久子の菩提寺徳蔵寺入口・白桝

木内家は代々国学を学び、教養豊かな文化人が多かった。殊に有蹊と号した久子の伯父は、和学を揖取魚彦翁に学び、「春の曙」「秋野の花」等の歌集を著わす程の風流人でもあった。特に「秋野の花」には佐竹侯の序文が載っている。

当時としては破格の事である。良久の交遊の広さと財力の一端を垣間見る気がする。良久は、時の文人、加藤千蔭、村田春梅、清水浜臣等との交遊もあったと伝えられるから、おいとこ節の爆発的な流行の陰に、これ等一流の文化人の見えない力添も大きくあずかっているのではないだろうか。歴史には嘘がないと言われるが、おいとこ節の流行にもそれなりの理由と背景のあった事がわかる。

いずれにしても、木内家だけでは、白桝粉屋おどりを百数十年に渡って伝える事など到底できることではない。第一、十人一組の踊り手に加え、横笛、太鼓、四ツ竹の役者を揃える事すらできない。白桝の村落が豊かであり、皆の気持が揃っていたからこそ、地元に正調白桝粉屋踊りが今日迄絶える事なく伝えられて来たのである。

白桝粉屋踊りを生み出し得た我が町は、昔から山の幸、海の幸に恵まれた人情豊かな住み良い里であり、素朴な土の臭いのする文化の育まれた所であったと言えるだろう。

飯高檀林（県指定史跡）

八日市場市飯高一七八一—一

日蓮宗に属し、正式名を妙雲山・飯高寺という。〝檀林〟とは〝栴檀林（センダンリン）〟の略で、本来は香木の林を意味するが、仏教では一般に学問所を〝檀林〟と呼ぶ慣わしとなっている。

飯高檀林大講堂

平山氏居城・飯高城内にあり、周囲の田園を見渡す高台に一万二千余坪の寺域が広がっている。

開基は天正十三年、教蔵院日生によるといわれ、同十八年蓮成院日尊が飯高城主で学問興隆の志しの高い平山刑部の疵護のもとに堂宇を建立した。これが飯高寺の開山であるというが、当初寺名を〝法輪寺〟といった。

慶長元年（一五九〇年）徳川家康により寺録三十石を賜わり、飯高寺と改称し檀林の公認を得る。

ちなみに、日蓮宗における初めての檀林であり、根本檀林とも通称される。

大講堂、庫裏、妙見堂、七面堂、鐘楼、鼓楼等、七堂伽藍が立ち並び、全国から集まる留学の僧は常時四百人を数えたといわれ、日蓮宗学の一大中心地であった。

このような隆盛を見るに至る要因としては、徳川家康の側室〝お万の方〟がこの寺に深く帰依したことが挙げられている。

生母の意に従った紀伊頼宣、水戸頼房の寄進がこの檀林の規模を名実ともに巨大なものとしたのである。

隔年六月一日より四日まで檀林において講説があり、付近の村々は皆仕事を休んで講に参じ、境内は立錐の余地がないほどであったとも伝えられている。

飯高檀林、あるいはほど近い多古町　中の〝中村檀林〟（正東山・日本寺）から江戸へ向う街道は江戸街道と呼ばれ、檀林へ向う僧や旅人により賑わった。今日でも一里塚（多古町・染井）、二里塚（芝山町・白桝）、三里塚（成田市・三里塚）、法華塚（成田市・法華塚）等それにちなんだ地名や石碑などが残っている。

維新を迎えて檀林制が廃止され、また明治十五年火災に遭ったこともあって、今日残るのは間口十五間、奥行十間の大講堂のほかは、庫裏、鐘楼、題目堂等にすぎず、訪れる人もまばらであるが、樹齢三百年余りの杉の大木に囲まれたおごそかなたたづまいに、かつての威光を垣間見る思いがする。

飯高檀林山門

●千葉交通バス（一日に九便）多古駅から二十分　飯高下車　徒歩五分

白桝粉屋おどり

おいとこ節発祥のいわれ

昭和六十年十一月　発行

発行　芝山はにわ祭実行委員会

おはなし　伊藤高夫

え　小堀龍司

協力　芝山はにわ博物館